

「私の夜が明けるまで」 第1話 シナリオ (60分)

サブタイトル：深夜のバグ

主な登場人物（本話登場）

- ・ ハン・ヨルム (30) — インテリアコーディネーター代理
 - ・ カン・ウヒョン (32) — 財閥グループ本部長（常務）
 - ・ シン・ミスク (50代後半) — ヨルムの母、フラワーショップオーナー
 - ・ ハン・ジュニ (33) — ヨルムの兄
 - ・ キム・ジェミン (35) — ウヒョンの秘書
 - ・ キム・ミョンボ (45) — ヨルムのチーム長
 - ・ イ・ハナ (25) — ヨルムの後輩
 - ・ カン・チャンシク 会長 (60代) — ウヒョンの父
-

S#1 大栄観光ホテル・エントランス（夜／回想的な静止画のように）

朝焼け前の薄闇。無人のロビー。カメラがゆっくり天井のシャンデリアから床へパンダウンする。

ナレーション（ヨルムの声） 「人は言う。夜が一番深いのは、朝が来る直前だと。」

暗転。タイトルロゴ「私の夜が明けるまで」。

S#2 ヨルムのマンション・寝室（早朝）

目覚まし時計（アンティーク調、文字盤が少し傷んでいる＝タイトル小道具①）が鳴る。ヨルム、機械的に起き上がり止める。表情に感情がない。

洗面台。鏡の中の自分と目を合わせず、淡々と身支度をする。

ヨルム（モノローグ） 「今日も、平熱で。」

S#3 カン邸・寝室（早朝）

広く冷たい印象の部屋。ウヒョン、すでにスーツを完璧に着込んでネクタイを結んでいる。鏡の前で結び目を確認し、無意識にもう一度、ぎゅっと締め直す。

秘書ジェミンからの電話が鳴る。

ジェミン（電話） 「本部長、お車の準備できました。」

ウヒョン 「ん。」

短く、感情のない返事。

S#4 地下鉄／会社ビル前（朝）

ヨルム、電車を降りて足早に歩く。同僚とすれ違いざま会釈。誰かがヨルムの陰口を言っているのが聞こえる（「あの、いつも一人でご飯食べてるらしいよ」）。ヨルムは表情ひとつ変えず通り過ぎる。

ヨルム（モノローグ） 「別に。誰にどう思われても。」

一方、ウヒョンの車が同じビルの正面に横付けされる。ヨルムとは違う入口（役員用エントランス）へ。二人はまだ互いの存在を知らない。

S#5 インテリア部門・オフィス（朝～昼）

ヨルムのデスク。チーム長キム・ミョンボが図面を投げるように置く。

キム・ミョンボ 「ハン代理、これ、また直しね。クライアントの気分次第だから仕方ないよね〜？」

ヨルム 「はい、分かりました。」

ヨルム、表情変えず淡々と受け取る。ミョンボ、少し拍子抜けした顔で去る。

後輩のイ・ハナが心配そうに近づく。

イ・ハナ 「代理、また明バン（明け方まで残業）ですか.....大丈夫ですか？」

ヨルム 「平気。ハナさんも早く帰りな。」

ヨルム、微笑むが、その笑顔はどこか作られたもの。ハナ、少し引っかかる表情を見せるが、それ以

上は踏み込まない。

S#6 カン・グループ本社・役員フロア（昼）

会議室。役員たちがずらりと並ぶ中、ウヒョンが淡々と資料を捲る。誰も彼に口答えできない空気。

役員A「大栄ホテルの件、本部長のご判断で進めても？」

ウヒョン「数字が全て証明してる。判断に迷う要素はない。」

完璧な受け答え。誰も彼の“内側”を知らない。

会議終了後、廊下でジェミンが小声で。

ジェミン「本部長、今日もお昼、抜くつもりですか。」

ウヒョン「（歩きながら）胃薬あるだろ。」

ジェミン「.....それもう、朝ごはんの代わりになってません？」

ウヒョンは答えず、足早に去る。

S#7 ヨルムの実家・フラワーショップ（夕方）

母ミスク、明るく客と談笑している。ヨルムが差し入れを持って立ち寄る。

ミスク「あら、来てくれたの！忙しいのに、偉いわぁ。」

テレビから流れるニュース（貧困家庭のニュース）を見て、ミスク、笑顔で。

ミスク「あんた見て、こういうニュース。あんたは親ガチャ成功やね、よかったねえ。」

ヨルム、一瞬だけ表情が固まるが、すぐに笑顔を作る。

ヨルム「.....うん。ありがとう、お母さん。」

机の下で、ヨルムの指が無意識に反対の手の爪の甘皮を強く押す。誰も気づかない。

S#8 兄ジュニとの立ち話（夕方・店の外）

兄ハン・ジュニ、疲れた顔でヨルムに耳打ちする。

ジュニ「お前、大丈夫か？最近、顔色悪いぞ。」

ヨルム 「大丈夫だよ。お兄ちゃんこそ、また残業？」

ジュニ 「.....俺たち、いつまで"良い子"やるんだろうな。」

二人、力なく笑い合う。何かを分かり合っているようで、どちらも本音は言わない。

S#9 カン・グループ本社・会長室（夕方）

会長チャンシクが柔らかい笑顔でウヒョンに向き合う。

チャンシク 「大栄の件、任せたぞ。.....お前ならこれくらいの重圧、楽しめるだろう？」

ウヒョン 「もちろんです、父さん。」

完璧な笑み。だが会長が去った後、ウヒョンの手がネクタイの結び目を無意識にぎゅっと締め直す。少し息苦しそうに、一瞬だけ目を閉じる。

S#10 オフィス・夜（残業）

ヨルム、一人で図面の修正をしている。同僚たちは帰っていく。ハナが心配そうに声をかけて去る。

イ・ハナ 「代理、本当に無理しないでくださいね。」

ヨルム 「うん、ありがとう。お先にどうぞ。」

一人になった瞬間、ヨルムの表情から"作り笑い"が消える。ただの、疲れた無表情。

時計を見る。深夜0時近く。ヨルム、荷物をまとめて立ち上がる。

S#11 カン・グループ本社・ジム（夜）

同じビルの高層階、役員専用ジム。ウヒョン、一人で限界まで身体を追い込んでいる。誰もいない空間で、吐きそうになりながらも止めない。

トレーニングを終え、壁にもたれて座り込む。胃薬をポケットから取り出し、水もなしに飲み込む。

ウヒョン（モノログ） 「.....こんなもんだろ、いつも通り。」

S#12 街角・深夜の道（夜）

ヨルム、会社を出て一人歩く。街の明かりが落ち着いた時間帯。ふと、24時間営業の小さな無人力

フェ（セルフ式）の看板が目に入る——「朝まで、灯り、消しません」（＝タイトル小道具②：夜通し開いている店）。

吸い込まれるように店に入る。

S#13 無人カフェ（深夜）

誰もいない店内。ヨルムはキオスク端末で激辛トッポギを注文する。慣れた手つき——何度もここに来ていることが分かる。

電子レンジの音。ヨルム、湯気の立つトッポギを一番奥の席に運び、無言で、真顔で食べ始める。額に汗をかきながらも表情は変わらない。まるで儀式のように、淡々と。

ヨルム（モノローグ） 「.....辛いはずなのに、これだけが、何も考えなくていい時間。」

その時、店のドアが開く音。ヨルムは反射的に肩をびくっとさせ、頭の上に手を持っていきかける（過剰な防御反応）が、すんでのところで止める。

S#14 無人カフェ・入口（深夜）

入ってきたのはウヒョン。ジム帰りのラフな格好（スーツではない——視聴者はまだ彼が誰か分からない演出でも良いが、脚本上は明確に描写）。顔色が悪く、胃を押さえている。

キオスクで胃に優しいスープか白湯のようなものを注文しようとするが、うまく操作できず戸惑う。

ヨルム、その様子をちらっと見るが、関わらないようにまた俯く。

ウヒョン、諦めたように隣のテーブル（ヨルムとは少し距離のある席）に座り、ペットボトルの水で無言のまま胃薬を飲む。

二人、互いに視線を合わせない。会話もない。ただ、同じ空間に、同じ「誰にも見せられない顔」をした二人がいる。

S#15 無人カフェ（深夜・時間経過）

沈黙の中、ヨルムのスマホが鳴る。母からのメッセージ通知（「明日も寄ってね～」のスタンプ）。ヨルム、見て、少し疲れた表情で画面を伏せる。

その拍子に、ヨルムのペンケースが床に落ちる。中身が散らばる音。

びくっと肩を強張らせ、頭を抱え込みそうになるヨルム——しかし今度は完全には防げず、一瞬、頭

上に腕を上げる仕草が出てしまう。

ウヒョン、それを黙って見ている。何も聞かず、何も言わず、ただ静かに視線を逸らし、聞こえなかったふりをして自分のスマホに目を落とす。

ヨルム、我に返り、慌てて散らばった物を拾う。手が微かに震えている。

ウヒョン（モノローグ、初めて彼の内面が言葉になる）

ウヒョン（モノローグ） 「.....見なかったことにしてやるのが、礼儀だろ。」

S#16 無人力カフェ・帰り際（深夜）

ヨルム、荷物をまとめて席を立つ。ウヒョンとすれ違いざま、初めて二人の目が合う。ほんの一瞬。

どちらも何も言わない。ただ、お互いに「今夜のこの姿を、誰にも言わないでほしい」という無言の了解のようなものが、視線の中だけで交わされる。

ヨルム、軽く会釈だけして店を出る。ウヒョンも、小さく頷き返す。

S#17 街・ヨルムの帰り道（深夜）

一人歩くヨルム。少しだけ、さっきより表情が柔らかい。

ヨルム（モノローグ） 「変な人。.....でも、何も聞かれなかった。それだけで、今夜はいい。」

S#18 カン邸・ウヒョンの部屋（深夜）

ウヒョン、ベッドに横たわりながら天井を見つめる。珍しく、少しだけ表情が緩んでいる。

ウヒョン（モノローグ） 「あの人も、今夜のこと、誰にも言わないだろうな。.....不思議と、それだけで少し楽だった。」

S#19 インテリア部門・オフィス（翌朝）

ヨルム、いつも通り出社。デスクに着くと、フロア全体がにわかにざわつく。

同僚A（小声） 「今日、本部長が直接視察に来るらしいよ！大栄ホテルの件で。」

イ・ハナ 「本部長って.....カン・ウヒョン本部長ですか？会ったことないけど、写真ではめちゃく

ちゃ怖いって噂の……」

ヨルム、特に気にせず図面の準備をする。

S#20 エレベーターホール（朝）

エレベーターの扉が開く。中から出てくるのは、完璧なスーツ姿のウヒョンと秘書ジェミン。フロア全体の空気が一瞬で張り詰める。誰もが直立不動で頭を下げる。

ヨルム、資料を持って歩いていて、顔を上げた瞬間——

目が合う。

昨夜、無人カフェで隣に座っていた“あの人”だと、二人同時に気づく。

ヨルムの手から資料が滑り落ちる。バサッという音が静まり返ったフロアに響く。

ウヒョン、一瞬だけ動揺した表情を見せるが、すぐに完璧な無表情に戻る。

ウヒョン 「……大丈夫ですか。」

声も、昨夜とは別人のように整っている。

ヨルム 「あ……申し訳ございません、本部長。」

ヨルム、慌てて資料を拾い集める。手が震えている。ウヒョン、それ以上何も言わず、フロアを一瞥して去っていく。

残されたヨルム、呆然と立ち尽くす。

ヨルム（モノローグ） 「……嘘でしょ。」

S#21 役員用会議室・視察後（昼）

ウヒョン、資料を眺めながら、頭の中では昨夜の光景がフラッシュバックしている——頭を抱えたヨルムの仕草。落とした資料。震える手。

ジェミン、様子がおかしいウヒョンに気づく。

ジェミン 「本部長？ どうかされました？」

ウヒョン 「……いや。何でもない。」

ウヒョン、窓の外を見る。何かを考えている表情。

S#22 オフィス・給湯室（昼）

ヨルム、一人で水を飲みながら深呼吸している。イ・ハナが心配して入ってくる。

イ・ハナ「代理、顔真っ青ですよ！本部長にそんなに怒られたんですか？」

ヨルム「ううん……何でもない。ちょっと、驚いただけ。」

ヨルム、鏡に映る自分を見る。まだ動揺が抜けない表情。

ヨルム（モノログ）「よりによって……あの人が。」

S#23 役員フロア・廊下（夕方）

ウヒョン、一人で歩いている。ふと立ち止まり、窓の外を見る。

ウヒョン（モノログ）「昨夜のことは、忘れよう。……ビジネスに、感情は要らない。」

だが、その表情はどこか落ち着かない。

S#24 インテリア部門・オフィス（夕方）

終業間際。ヨルムのデスクに、内線電話が鳴る。

同僚（電話を取り次ぐ）「ハン代理、本部長室からです……直接、呼びだそうです。」

フロア中の視線がヨルムに集まる。ヨルム、静かに立ち上がる。表情は平静を装っているが、内心の緊張が滲む。

S#25 本部長室・前（夕方）

ヨルム、ドアの前で一度深呼吸する。ノックする手が、ほんの少しだけ震えている。

ヨルム（モノログ）「大丈夫。ただの、仕事の話。それだけ。」

ドアが開く。

S#26 本部長室・中（夕方）

広く、冷たい印象のオフィス。ウヒョン、デスクの向こうで資料を見ている。顔を上げる。

一瞬、二人の間に沈黙が流れる。昨夜の記憶が、二人の間に見えない緊張として漂う。

ウヒョン 「.....座ってください。」

ヨルム、着席する。ウヒョン、淡々と資料を差し出す。

ウヒョン 「大栄ホテルの件、デザイン案に修正が必要だ。今週中に。」

ヨルム 「.....承知しました。」

事務的なやり取りが続く。だが二人とも、昨夜のことには一切触れない。緊張感のある"知らないふり"の応酬。

会話が終わり、ヨルムが立ち上がって去ろうとした瞬間――

ウヒョン 「.....ハン代理。」

ヨルム、振り返る。

ウヒョン 「昨日の.....いや。何でもない。お疲れ様でした。」

ウヒョン、言いかけた言葉を飲み込む。ヨルム、少しだけ戸惑うが、会釈して部屋を出る。

S#27 本部長室・一人になったウヒョン（夕方）

ウヒョン、一人になり、深く息を吐く。ネクタイの結び目に手をやりながら、窓の外を見る。

ウヒョン（モノログ） 「.....何やってるんだ、俺は。」

S#28 オフィス・帰り支度（夜）

ヨルム、帰り支度をしながらも、まだ動揺が抜けない様子。イ・ハナが声をかける。

イ・ハナ 「代理、今日は早く帰れそうですか？」

ヨルム 「うん、多分。.....お疲れ様。」

ヨルム、一人になると、無意識に机の下で爪の甘皮に指をやる。ハッと気づいて止める。

S#29 街・夜（帰り道）

ヨルム、いつもの帰り道を歩く。ふと、あの無人力カフェの前を通りかかる。看板の灯りがまだ点いている――「朝まで、灯り、消しません」。

少し立ち止まり、店内を覗く。誰もいない。

ヨルム（モノログ） 「.....今夜は、来ないか。」

少し残念そうな、自分でも気づいていない表情。首を振って歩き出す。

S#30 カン・グループ本社・地下駐車場（夜）

ウヒョン、車に乗り込む前に立ち止まる。運転手に一言。

ウヒョン 「.....先に帰ってくれ。少し、歩きたい。」

運転手、戸惑いながらも頷く。ウヒョン、一人で夜の街を歩き出す。

S#31 無人カフェ（深夜）

ヨルム、結局家に帰らず、いつものように店に来ている。キオスクで注文。トッポギを待つ間、ぼんやりとテーブルに突っ伏す。

その時、ドアが開く音。顔を上げるヨルム。

入ってきたのは、ウヒョン。今度はスーツ姿のまま、少し疲れた顔で。

二人、目が合う。今度は、逃げない。

長い沈黙。どちらも何と云えばいいか分からない。

ウヒョン 「.....偶然ですね。」

ヨルム 「.....そうですね。」

ぎこちない空気。ウヒョン、隣のテーブルではなく、少し離れた席に座る。気を遣っているのが分かる距離感。

S#32 無人カフェ（深夜・続き）

ウヒョン、白湯を飲みながら、ちらりとヨルムを見る。ヨルム、トッポギを黙々と食べている。

ウヒョン 「.....美味しいんですか、それ。」

ヨルム、驚いて顔を上げる。まさか話しかけられるとは思っていなかった様子。

ヨルム 「.....はい。頭が、真っ白になるので。」

ウヒョン、少し意外そうな顔をする。それから、小さく頷く。

ウヒョン 「分かります。.....僕にとっての、それが、これなので。」

胃薬のボトルを軽く掲げてみせる。二人、初めて、ほんの少しだけ表情が緩む。

S#33 無人力フェ・外（深夜）

店を出る二人。何となく、同じ方向に少し歩く形になる。

ヨルム 「あの.....今日のことも、昨日のことも.....」

ウヒョン 「言いません。」

即答。ヨルム、驚いて彼を見る。

ウヒョン 「僕も、言われたくないの。.....お互い様、ということで。」

ヨルム、初めて、心からの小さな笑みを浮かべる。

ヨルム 「.....はい。お互い様で。」

S#34 街角・別れ際（深夜）

二人、それぞれの方向へ別れる交差点に着く。

ウヒョン 「.....お気をつけて。」

ヨルム 「本部長も。」

ヨルム、歩き出す。数歩進んで、ふと振り返ると、ウヒョンもまだそこに立って、こちらを見ている。目が合い、二人とも慌てて視線を逸らし、それぞれの道を歩き出す。

S#35 ヨルムの部屋（深夜）

ヨルム、ベッドに横たわる。天井を見つめながら、小さく呟く。

ヨルム（モノローグ） 「.....変な夜。」

珍しく、口元に微かな笑みが残っている。

S#36 ウヒョンの部屋（深夜）

ウヒョン、同じように天井を見つめている。スマホを手に取り、何気なく社内システムでヨルムのプロフィールを検索しようとして——ハッと我に返り、画面を閉じる。

ウヒョン（モノログ） 「.....何やってるんだ、本当に。」

だが、その表情は、これまでのどのシーンよりも人間らしい。

S#37 エンディング・モンタージュ（早朝）

朝焼けが街を照らし始める。ヨルムの目覚まし時計（S#2の小道具）が再び映る——今日は、心なしか針の音が優しく聞こえる演出。

ウヒョン、鏡の前でネクタイを結ぶ。今日は、いつもより少しだけ、結び目に余裕がある。

二人、それぞれの朝を迎える。まだ互いの過去も、運命も知らない。ただ、“夜だけの秘密”を共有する相手ができたことだけが、二人の中に小さな変化として残っている。

ナレーション（ヨルムの声） 「私の夜に、初めてバグが起きた。」

タイトルロゴ「私の夜が明けるまで」再び浮かび上がる。

—第1話 終—

演出メモ

- S#13～16（初回の無人カフェ）と、S#31～34（2回目）は、同じロケーション・同じアングルの一部をあえて反復させ、「関係の変化」を画で見せる。
- ヨルムの防御反応（頭を抱える仕草）は、S#15で初めて視聴者に明確に見せる。以降、この仕草が繰り返し使われる伏線としてここが起点になる。
- タイトル小道具①（アンティーク時計）と②（無人カフェの看板）は、この後の話数（4話・7話・16話）で再登場するため、美術部と共有のこと。
- ラストのモンタージュは台詞なしでも成立する構成。音楽（OST）主導で朝焼けの質感を強調する。